

代表作時代小説

昭和四十六年度
日本文芸家協会編

編纂委員

尾崎秀樹

武蔵野次郎

村上元三

山岡莊八

和田芳恵

東京文芸社刊

昭和四十六年度

代表作時代小説

一二〇〇円

無
検
印

承
認

0093-719902-5170

昭和四十六年七月五日印刷

昭和四十六年七月十日発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三一二六
出張所 東京都新宿区弘方町一番地
振替・東京二七五七
電話・(三〇)二五五〇

ま え が き

本選集が文芸家協会を通じて刊行されることになってから十六年経っている。その間、毎年一定の愛好者があり、相当ひろい層の読者を持ち続け得たということは、何を物語っているのだろうか？ この選集の中には、時代小説とは如何なる小説か？ というような定義付けの出来ない種々さまざまな傾向の作品が収録されて来ている。一応歴史小説と云ってよいようなものから、舞台を古い時代にとっただけのものまで、とにかく各種各様の作風の作品が、さまざまな可能性を匂わせて紹介されて来た。最初の昭和三十年年度版に掲載された十八作家のうち、物故作家七名を数えているのだから感慨に絶えないものがある。が、こうして先輩を送り、次々に新人を迎えて、四十六年度の作品集には、二十四作家が賑やかに顔を揃えているのだから、まことに壮観と云えないこともない。

技法も実に巧くなった。今年も選衡の対象になった作品の数は百九十二篇にのぼり、作品としてはそれぞれそれなりに破綻なく、適当な面白さを持って書かれている。その点では、むしろ驚嘆した。しかしそれだけに、何となく不安にもなったと云ったら嘘になろうか？ 線が細いとか、まともり過ぎているとか云うのではない。昭和三十年の日本と昭和

四十六年の日本とは、経済生活の面一つを取上げてみても、読者側の生活内容には雲泥の相違が出て来ている。日本ばかりではない。世界のテーマも、未来学的な指向から生存破端を予想させる公害の発生まで、大袈裟に云えば一変してしまっている。

そうした科学技術時代の推移が、作品の中にどのような形で映し出されているかとなると、私は、大衆に大きな接断面を持つ時代小説だけに、もっと鮮烈な変化が出て来てよいのではなかったか、という気がする。文学のテーマは時流に左右されてはならない、などというのは遁げ口上で、もっと読者に身近かな位置に立ち、共に脈搏を教え合いながら、前進し、模索し合うところがあってもよかったのではないかと思う。

いや、仮りに、そう考えて、日々を真剣に生き続けている作家が多く出てくれてこそ、この選集もいよいよ新鮮さを加え、いよいよひろく読まれてゆくのではないかと空想する。むしろこれは、今回の選集に対する不満ではない。よくよく人間好きな日本人の、中でも最初から委員の一人であった老書生のどんな悠な新人への希望である。

山岡 莊 八

目 次

三州無宿・疾風の理吉	淡	夜	七夕の夢	声のきれいな女	敬神党自刃	葡萄酒譚	飛驒の残雪	居斬り	銃殺	朝霧に消えた男	そばの花	胡蝶の陣
青山光二	井口朝生	池波正太郎	伊藤桂一	岩井護	宇能鴻一郎	小田武雄	川口松太郎	五味康祐	早乙女貢	笹沢左保	杉本苑子	陳舜臣
七	三	三	五	五	三	四	一	三	三	三	三	二

夜嵐お絹の毒	戸川昌子	三五
結解勘兵衛の感状	戸部新十郎	三六
地藏堂の女	永井路子	三七
河内介の切腹	南條範夫	三五
刺客の娘	船山馨	四〇
真説平手造酒	三好徹	四二
辻無外	村上元三	四二
だるま吉五郎	八切止夫	四四
死んでおしまいな	柳田知怒夫	四九
伊達政宗	山岡莊八	五五
くの一地獄変	山田風太郎	五九

まえがき 山岡莊八
 あとがき 武蔵野次郎

作者のことは

この作品のさいしょの構想では、天城峠の辺りで、主人公にカッコいい立廻りをやらせるつもりだったので、筆をおろす間に思い立って、友人の車で現地を検分に出かけた。伊豆縦断の自動車道路が天城トンネルに行きつく手前、「御礼杉」を右へ外れると旧下田街道、それを登って行った先がむかしの天城峠だが、それよりも、そこへ行く前に、「御礼杉」のずっと手前で、思わぬ拾いものをした。湯ヶ島のはずれ、浄蓮ノ滝のバス停を左へ外れる石ころ路が旧街道で、その先に山本三軒とよばれる旧家があり、その一軒が、むかし山本屋という旅籠だったことがわかった。げんざいは改築して、むかしのおもかげはないが、八十何歳の老女が健在で、旅籠時代を知る舅からきいたという話を、いろいろきかせてくれたのが実に興味深かった。天城峠の立廻りは、プラン変更で中止したが、山本屋の方は、老女からきいた話を、少しばかり、作中に取り入れて書いた。

大正二年二月二十三日兵庫県生れ 粕江市和泉二六六丁182

日本文芸家協会評議員

「修羅の人」により第一三回小説新潮賞を受賞 主著「修羅の人」

三州無宿・疾風の理吉

青山光二

一

理吉が鞆子の宿に着いたのは、かれこれ夕七ツ（午後四時）、松並木の梢に宵闇が落ちかかる頃おいであった。遠州掛川を出たのが夜明けの七ツ（午前四時）、鞆子までは、東海道をひとすじに、十里半の道のりである。急げば一日に二十里以上もの歩行能力をもつ理吉の足であつてみれば、いまごろは駿府（静岡）・江尻をとくに過ぎて、由井が蒲原あたりまで行き着いてもいい理屈だつたが、今日は、大井川を越すのにたいそう手間どつた。大雨の後の増水がひかず、川留めは解かれていたものの、かんじんの川越人足がなかなか動いてくれない。じじつ危険も大いにもなつたから、あきらめて金谷宿へ引返す旅客も多かつたくらいで、まこと、箱根越えより難儀な大井川越えであつた。この川を越えれば駿州、人を斬つてその足で草鞋をはいた理吉は、さすがにほつとした。無宿人どうしの殺傷沙汰は、国を売ってほとぼりをさませば、なしくずしに、奉行所の追求もいつかとだえるというご時世である。島田の宿で昼食に茶屋へ立ち寄つたのは、藤枝、岡部と道を急いで、やがて、ここ鞆子の宿の棒端（宿場はずれ）にさしかかる――。

一軒の農家ぶうの小家に人だかりがしているので、理吉は足をとめて覗きこんだ。

「さあ殺せ。邪魔なら、さつさと殺しやがれ。おい、早えとこやらねえかい！」

胴間声で啖阿を切つてわめいているのは、座敷の上り端に大の字に寝た雲助ふうの大男で、十人ばかりの男が一方へ身を避けるように寄りかたまっているのは、どうやら、盆の勝負を楽しんでいたところへ、わからずやの邪魔がはいったという恰好らしい。男たちのうち三、四人は、明らかに渡世人である。

「そのワルは何者でござんすかい」

手近の若い男に、理吉は訊いた。相手は振向いて、月代をのばした理吉の浅黒い、鼻筋の通つた、眼に力のあつた顔を見、ついで、棒縞の廻し合羽を撥ねた小脇に三度笠をかかえ、振分け荷物に手甲脚絆という、お定まりの旅にん姿に視線を這わせてから、なにか安心した気配で、囁き声になつた。

「川越人足の丑つてえ、札つきのならずものだよ。酒くらつては、こうやって三日にあげず強請をかけるだから、代貸さんもたまつたもんでねえすらよ」

「あの、まんなかにいなさるのが代貸さんで？」

「弥勒の半次さんだ。駿府の安東文吉親分の身内だね、見かけはやわらかそうだが、なかなかどうして……」

「きかねえお人でござんすかい。それならそれで、こんなゴミクタ野郎、殺せといつてゐるんだから、注文通り、

あの世へ送っちゃまえばよさそうなものだ」

「そ、そんな、お前さん！」商人ふうの若い男は呆れ顔で、理吉が腰へぶちこんだ銀の胴輪の長脇差へ、思わず眼をやった。「なんしろ安東の親分てのはきびしい人でね、乾分の衆に、脇差を差すな、博奕場では酒をのむな、云いつけていなさるくらいだっているから、身内の衆だつて、無分別なことはしねえだよ」

「へーえ、変った親分でごさんすねえ」

安東文吉はたしか二足の草鞋だが、乾分にまで、かたくるしいことを云うには当るまい、という理吉の内心だった。川越人足の丑公は相変らず、さあ殺せ、殺しやがれとわめいていた。駿府の安東文吉親分の縄張りうちには五十個所をこえる定賭場があつて、どれも繁昌しているときいていたが、これがその一つかという想いで、理吉は人だかりを離れた。

ほんの五、六歩、踏みだしたときである。ガチャンドスーンという容易ならぬ、けたたましい物音がひびいた。とたんに理吉は、バネではじかれたように踵を返して、人垣を押しわけ、笠と振分け荷物を軒下に置くと、土間にはいつて行つた。そして、手にしていた徳利や手近の煙草盆を、手当りしだい、その辺へ投げつけてあばれていた丑公の毛むくじやらの足をつかむなり、やにわに土間へひきずりおろした。尻餅をつきながら、

「何しやがんでえ、この唐変木め」破れ鐘のような声を、丑公は張りあげた。「おのれどこの馬の骨だ」

「いいかげんにしねえか」

薄笑いをうかべて、微動もしない理吉に、いよいよ猛り立った乱暴者の酔漢は、内懐に手をいれると、いきなり七首を抜いた。

「邪魔立てしやがると、手前のどてっばらに……」

赤銅色の腕を突き出したとたん、いつ抜いたとも見えぬ理吉の長ドスが薄暗がり閃光を曳いて、つぎの瞬間、丑公の右手首は、七首を握ったまま、土間にころがっていた。

「ぐえッ」

と奇声を発した丑公が、血を噴き出す右腕をおさえて遮二無二戸外へとび出して行つた頃には、理吉は、手拭で長ドスの刃を拭つて、手早く鞆におさめていた。

「代貸さんとお見うけますでござんす」

彼は、脇差をつかんで棒立ちになっている、顔色の蒼黒く見える、小肥りの男に頭をさげた。

「ついつい出過ぎた真似をいたしやして、お氣にさわりましたら、ご免ナおゆるしをこうむらせておくんなさいまし」

「まったく、出過ぎた真似をしてくれたぜ」

「左様でござんすか。出過ぎた真似でござんしたか」

「だって、お前、いま自分でそう云ったじゃねえか」

「自分で云うのと、あんさんから、そうおっしゃられるのでは、ちっとばかり、話が違ってくるんじゃないか」

「やいやい、手前、どういうつもりだ」弥勒の半次は、威丈高いさだかになった。「丑の野郎が、このまま泣き寝入りにひっこむはずはねえ。仲間のごろつきどもを、それこそ五十人もそろえて、仕返しに押しよせて来やがったら、ここはどうなると思うんだ」

「ごろつき、ねえ。ごろつきはお互いさだが、川越人足の五十人や百人、いや千人でも、海道一とうわさの高い安東親分のご一家が、ビクビクなさるには当らねえんじゃないか。おっと、申しおくれやしたが、あつしは三州の理吉、足も早いが手も早いってんで、はやての理吉なんぞと、いやもう、からかわれておりやす半端な野郎でござんす。お見知りおきをいたさうござんす」

さっと身をひるがえしたかと思うと、軒下の荷物をひろって理吉は、宿場の方へ、たったツと足を急がせて行った。まだ五、六人は残って、家の中を覗きこんでいた物好きな連中が、充分堪能したおももちで、すらりと背丈のあるその後ろ姿を見送った。

理吉は、鞍子あしこ名物のところろ汁をすすする暇もなく、つる

べおとしに暮れて行く街道筋を急いだ。暮六ツ（午後六時）までに安倍川岸に着かねばならない。暮六ツを過ぎると、夜間の渡河わがわが禁止されているのは、どの川でもおなじことだった。安倍川を渡れば駿府だが、理吉が駿府への道をこのように急ぐのは、べつだんの仔細しじみあつてのことではない。二丁町の廊ろうへ、はまりこもうと思つての韋駄天道いだだう中なのだ。川岸まで一里そこそここの道のりは、飛ぶような理吉の足に、みるみる縮まって行く。

二

三州の理吉は、掛川あたりを縄張りとする堂山の鬼の竜蔵の乾分である。ところが昨年（天保十五年）のこと、鬼の竜蔵は、大猿の仲の相良さうらの富五郎の乾分だった由公という三下を、ふとした言葉の行違いから殴りつけ、それがもとで由公は死んでしまった。富五郎の身内がこのことを掛川藩の役人に密告したため、鬼の竜蔵は捕えられて入牢したのが、年号も弘化と改まった昨年の暮である。

竜蔵の跡目はとりあえず、筆頭乾分の高田の鶴吉が継いだものの、鬼といわれた竜蔵の半分の威勢も鶴吉にあるわけはなく、乾分は一人去り二人去りして、一家は火が消えたようにひっそりした。縄張りはお隣の相良の富五郎に荒されはうだい、めっぽう腕の立つ理吉が、一

人で踏んばってみたところでおっつかぬ。

弘化二年の春が過ぎ、夏が過ぎた。掛川宿の棒端で居酒屋をやっているおみのと、理吉は以前からいい仲で、夫婦同然の契りを重ねていたが、高田の鶴吉とおみのができているという噂が、ふと耳にはいった。おみのを問いつめるとあくまで否定するのだが、理吉には、噂の方に信憑性があるような気がしてならない。

旧暦九月五日未明、理吉が旅仕度をして、おみのの店へ向ったのは、高田の鶴吉が自宅にいないのをたしかめたいうでのことであつた。おみのの店は、居酒屋の裏手にひと間の住まいがあるだけの小屋がけた。雨戸を蹴やぶって、疾風のようにとびこんで来た理吉に、おみのの柔い軀を抱えこんで眠りこけていた鶴吉は、仰天して夜具から滑りおち、四つん這いになった。ドスに手を伸ばそうとしたのだが、その間はなく、理吉の刃はすでに振りかぶられていた。……

四つん這いの鶴吉に負ぶさる恰好になったおみのの姿態が、駿府二丁町の遊女小花の小麦色の肌にかぶさって、執拗に理吉の視野にうごめくのである。おみのの鶴吉を庇おうとしたのだから。そうとしか思えない。はっとして理吉は、すでに振りおろしかけた刀を引いたので、おみのは臍脇まで截ちわられずにすんだとはいふものの、燃えるような緋色の長襦袢はみごとに裂け、むっちりと

白い肌が仄明りの中で、左半身だけ、腰まで剃きだしになった。刀を取りなおして鶴吉の臍腹を刺し、さらに止めを刺した理吉は、そのまま後も見ずに、畳を蹴って、おもての街道筋へ駆けだしていったが、うつぶせに倒れて喘いでいたおみのの、血の色と長襦袢の緋色との見分けのつきかねる、むごたらしくも艶な後ろ姿は、彼の網膜に焼きついて、どこまでもつきまとった。

駿府二丁町の妓楼木下屋にあがった理吉が、思わず三日三晩も流連のていたらくとなつたのは、いわばその、左半身を腰まで剃きだしにした、おみのの後ろ姿の所為だつた。敵娘の小花が三州岡崎の在から来ているというのが、おなじ岡崎生れの理吉の郷愁をそそるところあつたのも事実だが、男を庇おうとして刃の前に身をなげだしたおみのの、肉感をそそる姿態が眼の前にちらついてくると、彼は、買った女の生身の軀を思うさま責めさいなまずにはおられないのだ。するとまた、それが、狎れたしんだおみのの、すみずみまで知りぬいている、熟れた果実のような肌ではないのがやりきれない。かなえられぬ想いを何とか遂げようとする執念男のように、理吉は、おみのに似通うところはどこもない小花におぼれて、うつつをぬかしていた。

路用は五両ばかり持ちあわせていたから、揚代には事欠かないが、旅はこのさき、どこまでもつづくのだ。手

近の定賭場を覗いて、つごうでひと稼ぎ——、という無職の旅にんらしい氣をやつと理吉が起こしたのは、三日晚、流連けたあぐくの九月八日夕刻のことである。

聞きおぼえの小花の知識では、近いところで両替町、伝馬町、宮ヶ崎、草深あたりに定賭場があるが、浅間神社のある宮ヶ崎の賭場が、とりわけ賑わうということだった。

「けれど、お前さん、宮ヶ崎へは寄りつきなさらねえが得策さんす」

「近くに奉行所でもあるのかい」

「宮ヶ崎のおいてけ堀とか……」

「身ぐるみ剥がれるってわけか。そいつはおもしれえ」

「やらずのお紺てえ粹な姐さんが代貸で、たいていの張り客は骨ぬきにされるってえ話さんすよ」

無表情な顔で小花は云って、理吉の太腿をつねった。

「おいてけ堀」の宮ヶ崎の定賭場をふくめて、駿府界限、近郷近在の火場所^{ひやし}は、すべて安東文吉の縄張りうちである。駿府代官所の筆頭目明として十手捕縄をあずかる文吉親分に、幕府は給与も手当も出さぬかわりに、賭場の開帳とテラ取りを黙認していた。しぜん、手入れの心配もないことになっているので、堅氣と遊び人とを問わず、安心して客が詰めかけるのであった。

浅間神社の表参道うらにある定賭場で、理吉は一ッ時

たらずのあいだに、十両ばかり、コマをふやした。盆をかこむ客たちがようやく嘆声^{たんせい}をあげると、代貸のお紺も、「そちら、ひどく芽があるじゃありませんか」

嬌然^{きやうぜん}と流し目をくれ、声をかけて来た。理吉は微笑して、

「どうやら、浅間さまのご利益でござんしょう」

「いえ、なんとも巧者な勝負を打ちなさる。あたしや惚ればれするよ。久しぶりで、ほんものの博奕打ちつても

のを見せてもらつたと、こう申してるんでござんすよ」

「ご冗談を——。とはいうものの、やらずの何とかとやら評判の高い姐さんに、そうまでおっしゃられて、この半可打ち、冥利につきるってもんでござんす」

からかいと謙虚をつきまぜた理吉の応答に、どつと哄笑^{こうしょう}が起こり、盆の空氣は和んだ。はじめ小出しに張りながら、サイコロの癖、壺振りの癖をじっくりと見きわめ、その上で肚をきめて勝負に出る。年季のはいった博徒理吉の本職ぶりに、お紺は目をうばわれたものらしい。

やらずのお紺と嬌名^{きやうな}をうたわれるこの女代貸は、はんぶん客寄せの飾りとおぼしく、ほかに何にんも筋者らしい身内^{みうち}がいて、盆の世話をやいており、何の用か、三下の出入りもけっこう頻繁^{ひんぱん}だった。お紺はどちらかといえは小柄な女だが、洗髪を櫛^{くし}巻にし、黒襟のついた紫鷲^{むらさきじゆ}の袷^{あじ}の裾を割って、婀娜^{あだ}っぽい横坐りになったところは、

なかなかどうして大姐御の貫禄だった。卵型の肌理のこまかい顔や目許の涼しさは楚々としているが、気の強そうな性格が、眉根の辺りや鼻筋の通り具合にうかがわれた。

「丁半どっちも、張ったり張ったり」

「平方に三両……、二両……、一両……」

「丁半十兩、そろいやした」

理吉は、それから、着実に勝負にウカってコマをふやした。おおよそ、判断よりも行動が先に立つ男だが、盆に坐ったときだけは、奇妙なことに冷静沈着な態度をうしなわれない。天成の博徒かもしれない。理吉の勝ち連にあやかろうとする素人の客が、理吉が丁に張れば丁、理吉が半に張れば半に張るので、盆のコマがそろわず、中盆がいらいらするひと幕があった。小半時もたった頃、年輩の大柄な男が理吉の脇へ来て、声をおとして云った。

「お客さん、もしや三州の理吉さんではござんせんか」

「へい、いかにも三州の理吉でござんす」

「手前親分安東文吉が、とりいそぎお耳に入れてえことがあると申しておりやす。お楽しみ中、申しわけもござんせんが、親分居宅までおいでいただきとうござんす」
いやといえ、羽交締めにして組み伏せにかかって来
そんな気配でもあった。

（手がまわったか……）

と理吉は、とっさに、そう思った。三日前、鞠子の定賭場の薄暗がりで見かけた顔が、たしかにさっき、ちらっと覗いたようだが……、召捕る気なら人数をそろえて、有無をいわさず襲いかかればすむことだとは、そのとき、彼は考え及ばなかった。

コマ札は十三兩二分の現金にかわった。うち三兩を、ウケデラとして、理吉は盆にのこした。

「おそれいます」

切れ長なお紺の眼が、誘うような微笑をたたえて、理吉を見やった。

（おいてけ堀でもなけりゃ、やらずのお紺さんでもねえじゃねえか。なんてこったい……）

理吉は呟いて、案内役の小井出の繁蔵（と、あとで名乗った）の後に従った。

浅間神社のある宮ヶ崎は駿府城の西北側、安東村は北側で、武家屋敷の建てつまった城の外廓を迂回して行っても、たいした距離ではない。理吉は、みちみち、繁蔵を斬って逃げようかという気も、よほど動いたが、岩を据えたように頑丈な軀つきのこの男、妙に隙がないのだ。年のころは、理吉同様、かれこれ三十恰好だが、軀つきに似ず、当りがやわらかいのも理吉を尻ごみさせた。

「安東村の鎮守熊野神社の、きょうは宵宮で、夜通し、

にぎやかでござんすよ」

そんなことを、ぼつりと繁蔵は云ったが、なるほど、祭り太鼓を間遠に打ちならす音が歩くにつれ、だんだん近くにひびいて来た。

安東村の入口ちかく、一丁四方もあろうかと思われるひろびろとした敷地に、文吉親分の本拠、どっしりと間口の広い百姓家が建っていた。文吉は、大百姓の長男として、この家で生れ、成人したのである。どう見ても、博徒の親分が住むとは思えぬ家構えだが、繁蔵に導かれるまま、理吉が通った親分の居間には、やはり、型のごとく縁起棚に燈明があがって、櫛の長火鉢を前に、ご本尊が坐っていた。かしこまって両手を突いた理吉に、

「まあ、らくにしねえ」

と気さくな声をかけた文吉は、月代の広い文金ふうの髪型こそ親分親分しているものの、綿木綿の衣類を無造作に着たところは、百姓親爺のようでもある。かくべつ質素な人柄なのである。

「お前はん、これからどっちの方へ行きなさるおつもりだ」

「へい、江戸へところざしておりやす」

「誰ぞを頼って、江戸へ行きなさるか」

「頼るお人っていうはござんせんが、あつしのような、人間のクズが紛れこんでくらすには、江戸が一番だろう

と思案いたしやしてのことでござんす」

「お前は人が人間のクズだとは、わっちは思わねえがの、それはそれとして、江戸もけつこうだ。今日はここで寝て、明日さつそく、早立ちで草鞋をはきなせえ」

「お貸元、おことは心にしますでござんすが、早立ちとおっしゃるのは、そりやまたどうして——」

「町奉行の同心が、お前はんを探しておる。捕られたら、牢へ行かざあならねえでの」

「……？」

「川越人足の仲間が訴人でもしたずら」

「……鞆子の宿の丑って野郎の一件でござんすか」

「代貸の腑甲斐なさから、縁もゆかりもねえお前はんに厄介をかけたが、ウシか豚みてえな野郎でも、人間いっぴきの手首を斬っておとせば、こいつはやっぱり公儀の掟にそむくことになるだよ」

団栗眼をぎょろっと光らせて、文吉は説教口調になったが、理吉はうわの空であった。丑公の手首を斬っておとしたのが罪になって、奉行所の手がまわるとは、実のところ、予想していなかったのだ。てっきり、高田の鶴吉殺しのことだと思ったとたんに、肩すかしを喰って、きょんとしている。それにしても、町奉行が追っかけている犯人を、わざわざさらって来て、逃がしてやろうというのだから、変った目明しだ。安東文吉が、無宿の